



UEDA

Women's Junior College

上田女子短期大学附属図書館報

みすず

No.41
2014.12

世界遺産、雑感

総合文化学科 教授 中西 満義

Ueda Women's Junior College Library News Misuzu

本年六月、富岡製糸場跡(富岡製糸場と絹産業遺産群)が世界遺産に登録された。日本の近代化に多大な貢献をした近代化遺産の一つで、世界遺産としては国内では18番目、文化遺産に限れば14番目となる。地元の人々が歓喜する様子を伝える映像を記憶されている方も多いと思うが、世界遺産登録云々のニュースは、昨今、六月恒例のトピックスとなっているように感じられる。つぎは長崎の教会群?とか、気の早い話も飛び交っていて、日本人は「お墨付き」に弱いのだなと改めて思い知らされるが、私の関心は登録後の現状にある。

昨年、世界遺産登録で沸き立ったのは、静岡、山梨両県であった。言わずと知れた「富士山」である。95年の「白川郷・五箇山の合掌造り集落」での岐阜、富山、そして、今年の群馬となると、8県と境を接する長野にあっても焦心を募らせているのではと忖度する。そのことは措いて、富士山の世界遺産登録には環境保全の宿題が課せられていた。粗大ゴミの不法投棄などによる環境破壊の状況は伝えられていたが、入山者急増にともなうゴミやし尿処理の対策も喫緊の課題で、そのため基金として入山料(保全協力金)制度も導入された。環境保全という課題は、程度の差こそあれ、いづこも同じであるようだ。尊く美しい富士を後世に引き継いでいくためには止むを得ないことなのだろうか。

この富士にかんして、自然遺産と誤認している人が多いが、「信仰の対象と芸術の源泉」という言葉が副えられていることからわかるように、文化遺産である。現在、私は、その「芸術の源泉」としての富士と格闘を続けているところだ。檜笠に旅包みを背負った西行が富士山を眺める姿を捉えた「富士見西行」をテーマとして取り組んでいるのだが、なかなか手強い。文化史上、就中、美術史上の富士山からすればほんの一部にすぎないのだが、それでも、雲や霞に隔てられて山頂はおろか裾野すら見えてこない。例えるなら、樹海に入り込んでしまった者のようで、いまだに出口は見出し得ていない。いずれ、その成果を示す日が来ることを願っている。

富士山をはじめ、世界遺産に触れることは、日本を知ることにつながるだろう。世界遺産は、ただ観光にとどまらず、さまざまな領域の教材になり得る。学生の皆さんも、どのような関心からでも、世界遺産に触れてみてほしいと思う。現状と課題を把握することで、これからの方向性やあるべき姿が見えてくる。できることなら、現地に足を運んで実際を見て、感じてほしい。ただ、そのことに反するようだが、富士山は「よそながら見る」ものであって、足を踏み入れる山ではない、と思う。信仰の歴史や登山の醍醐味を知る身ではあるが、そう思う。言わずもがなの私感である。

目次

世界遺産、雑感
図書館総合展への出展について
不安な音楽家による論文作成指導の 可能性またはその是非に関する考察
図書館員と図書館員のたまごたちによるおはなし会 『星の王子様』との出会い
本を提供する立場として
読書の大切さ
読み聞かせ
図書館ガイド
本学教員の新刊著作
図書館ニュース 第15回七夕文学賞

CONTENTS

総合文化学科 教授	中西 満義	1
総合文化学科 准教授	木内公一郎	2
幼児教育学科 教授	町田 育弥	3
幼児教育学科 非常勤講師	山浦 美幸	4
幼児教育学科 1年	下村 愛	5
幼児教育学科 2年	佐塚 友香	5
総合文化学科 1年	逸見 彩華	6
総合文化学科 2年	篠崎 菜南	6
		7
		8

図書館総合展への出展について

総合文化学科 准教授 木内 公一郎

今年第16回を迎えた図書館総合展。本学は初めてこれに出展することになりました。期間は2014年11月2日～11月8日(展示会11月5日～7日 於パシフィコ横浜)です。図書館総合展は3万人以上が来場する日本最大の図書館「見本市」です。公共、学校、大学、専門図書館だけでなく、出版、書店、図書館用品やシステムを扱う企業等がブース、ポスターを出展します。また期間中は毎日、様々なテーマを扱ったフォーラムを開催しています。

本学はポスターセッションに出展します。テーマは「上田女子短期大学の図書館力～学生と教職員の協働」です。これは「図書館サークルFLC」の結成以来、学生による図書館活動が活発になってきています。学内のみならず、学外における地域貢献活動が本格化し、地域に認められてきたという背景があります。このポスターでは一連の活動を全国にアピールしたいという意図から作成されました。

ポスター作成にあたっては、資料や写真を附属図書館司書の須田さんから提供していただきました。編集、印刷については田辺印刷様のお世話になりました。また作成費、参加費については短大からの支援を受けています。そしていつも丁寧な指導をしてくださっている山浦美幸先生、歴代の図書館サークルFLCのメンバー、図書館司書課程で学んできた多くの学生の皆さんに深く感謝します。

ポスターセッションでは、来場者の投票によって、優秀賞を選びます。この「みすず」が発行される頃には優秀賞が発表されていることでしょう。会場での反応を含めて、本当に楽しみです。(了)



長野県の小さな短大の大きなプロジェクト

上田女子短期大学は長野県上田市にある短期大学です。学生数400名余の短大ですが、「図書館力」は長野県でも随一です。

附属図書館 図書館力を支える基盤
附属図書館は、たくさんのいろいろな出会いを期待できる場になっています。開いている本を見れば、思いがけず出会った本、それぞれの学生が今どんなことに取り組んでいるのを感じながら、自分の向かう方向を考え、特長の意外な特技を発見する。次は何をやろうか・・・
小規模校だからこそ、日常的にいつもお互いに関わりを持つことができます。図書館員、教員はいつも学生を見守り、援助し、共に働いています。

図書館司書課程 (司書教諭課程・教職課程併設)
短期大学の図書館司書課程はたった2年の養成期間しかありません。しかし、学生たちは集中して学習しています。そのため「実践」が中心となり、司書としての知識、技能、教養を身につけて、卒業していきます。教える教員もインターンシップ、模擬授業、図書館ボランティア、ロールプレイング、ケースメソッドなど多様なメニューを用意しています。

図書館サークルFLC
FLCはFuture Librarians Club(未来の図書館員の集いのこと)です。部活は19年、読書や情報図書館の利便性を目的に結成されました。上田情報ライブラリーにおける読み聞かせ活動(図書館員と図書館員のためのおはなし会)、附属図書館でのおはなし会など多彩な活動を展開しています。

学生と教職員の協働

学生による地域貢献活動
学生の活動は上田地域を中心に広がっています。主な活動を紹介します。
(1) 「福田本フェスティバル」(上田市福田公民館)
(2) 上田地域の図書館を巡るバスツアー
見学だけでなく、学生による図書館体験、サービスへの改善提案を行いました。
(3) 上田市立大学図書館 引越作業ボランティア
(4) 東御市立図書館 引越作業ボランティア
(5) 上田市立図書館の基礎業務ボランティア
その他、おはなし会など、地域からも期待される存在になっています。

図書館職員学び直し講座
図書館職員のリカレント教育プログラムです。平成21年から始まった講座は第2期に入っています。120時間という長丁場ですが、東御の功業、学校図書館さんが受講しています。今年は「地域歴史資料デジタル化講習」を開催しました。

デジタルアーキビスト資格取得講座 (在学生及び図書館職員向け)
デジタルアーキビストとは、地域資料、文化財を収集、整理、保存、さらに発信する技術を持った専門家です。図書館、博物館、文書館、地域社会において活躍が期待されている新しい職業です。デジタル化の活用、文化資料、著作権などを学びます。

図書館サークルと教職員の関係

私たちにとっての「協働」

学生

出会いによる「化学反応」

仲間	専門誌	利用者
他者の読書を知覚。	社会との「つながり」専門性の強さを見える。	求めるものを認める。多様性の発見。
自分を知る手がかりになる。	仕事を勉める手がかりになる。	図書館にこんな役割があるのを知る。



図書館司書課程 (司書教諭課程・教職課程併設)

短期大学の図書館司書課程はたった2年の養成期間しかありません。しかし、学生たちは集中して学習しています。そのため「実践」が中心となり、司書としての知識、技能、教養を身につけて、卒業していきます。教える教員もインターンシップ、模擬授業、図書館ボランティア、ロールプレイング、ケースメソッドなど多様なメニューを用意しています。

図書館サークルFLC

FLCはFuture Librarians Club(未来の図書館員の集いのこと)です。部活は19年、読書や情報図書館の利便性を目的に結成されました。上田情報ライブラリーにおける読み聞かせ活動(図書館員と図書館員のためのおはなし会)、附属図書館でのおはなし会など多彩な活動を展開しています。



おはなしの会の様子



上田女子短期大学の図書館力

学生と教職員の協働

学生による地域貢献活動

学生の活動は上田地域を中心に広がっています。主な活動を紹介します。
(1) 「福田本フェスティバル」(上田市福田公民館)
(2) 上田地域の図書館を巡るバスツアー
見学だけでなく、学生による図書館体験、サービスへの改善提案を行いました。
(3) 上田市立大学図書館 引越作業ボランティア
(4) 東御市立図書館 引越作業ボランティア
(5) 上田市立図書館の基礎業務ボランティア
その他、おはなし会など、地域からも期待される存在になっています。

図書館職員学び直し講座

図書館職員のリカレント教育プログラムです。平成21年から始まった講座は第2期に入っています。120時間という長丁場ですが、東御の功業、学校図書館さんが受講しています。今年は「地域歴史資料デジタル化講習」を開催しました。

デジタルアーキビスト資格取得講座 (在学生及び図書館職員向け)

デジタルアーキビストとは、地域資料、文化財を収集、整理、保存、さらに発信する技術を持った専門家です。図書館、博物館、文書館、地域社会において活躍が期待されている新しい職業です。デジタル化の活用、文化資料、著作権などを学びます。





不安な音楽家による論文作成指導の可能性またはその是非に関する考察

幼児教育学科 教授 町田 育弥

「論文」というものを、私は書いたことがない。そういうものを要求されない境遇にあったからだ。

この短大の教員募集要項には、論文提出が条件として謳われていた。ただし「著書・論文・計〇編」という記述だったので、私は事務局に問い合わせしてみた。

「論文ゼロ、著書〇冊で合計数は満たしますが、受け付けて頂けますか？」算数としては正しいはずだ。

それでよいというので応募した結果の現職である。

今になって学校側は「しまった！」と思っているかもしれない。あの日は雪かきが大変だったのだろう。

私のこれまでの仕事は、作曲、演奏、家事、子どもの音楽指導や音大生の授業。どれも実践あるのみ。

どんなに精緻な論を構築して理路整然と述べたところで、書く曲がつまらない、演奏が下手、子どもや学生とコミュニケーションがとれない、では困るのだ。

「美しいか」「面白いか」「まともな人間か」などという、捕らえどころのない価値を追っての迷走と試行錯誤のくり返しだが、長年続けるうちに、それなりの持論や方法論、関連する事象とその意味の体系観ぐらいは持つに至ったつもりだ。ただ、すべて「やるのは私」なので、文字に書いて説明を試みたとしても一顧だにされず、「で、曲は書けたか？」と詰問されるか、鬼ごっこが始まってしまうか、「弾けないのね」と同情されるか、いずれにせよ良い反応は期待できない。

だからこっそり本を書いた。これは実は論文なのだが、主に五線とオタマジャクシで記述してあるので、そのことがバレる心配は少ない。万一怪しまれても「作曲をしたのだ」と言い逃れる余地を残してある。

そんな私がこともあろうに学生の論文作成を指導する立場となり、困りはてているところに一冊の本が降ってきた。『アカデミック・スキルズ』～大学生のための知的技法入門～（慶應義塾大学出版会刊）である。

主筆・監修を担当された佐藤 望先生（商学部教授）を思いがけない経緯から知り、その御著書を探したところ、まず最初にこの本がヒットしたのだ。

自ら問いを立て、収集した情報を多角的な視点から照合・分析し、批判的考察を通して自論を構築し、さらなる問いに目を開いてゆく…。その過程・方法から

論文の具体的な書き方や細かい約束事まで、学生向けに懇切丁寧に示唆した好著である。あまりに見事な「手取り足取り」なので、書かれている方法を無批判になぞっただけ（それでも充分価値はある）の学生が、「できましたぁ」と勘違いしないか、それが心配だ。

ゼミなどで扱いは慎重を期すべきであろう。

学生には買わせない方がよいかもしれない。

この本の要旨を、“表現” ってのは、厳しいんだぞ、最低このぐらいいないと“私が” “考えた” “やった” “伝えた” ことにはならんのだぞ。というメッセージだと、私は鋭く誤読した（このように、自分に都合よく誤読する極意については、本書では残念ながら言及されていない。教育的配慮が行き届いているのだ）

表現の修行ならば積んできた。挙げられている事例も、分野は違えど、その質においては思い当たることばかりである。大丈夫。論文指導恐るるに足らず。

この本の「読みきかせ」を練習しておこう。

ところで、図書館やインターネットを最大限に活用した情報収集のノウハウや、情報の取捨選択のコツがこと細かに書かれた第3章（やっとな図書館に辿りついた）に限っては「思い当たる」どころか知らないことばかり。無知を思い知らされたうえに、表現の準備はまず情報収集から…という正論に虚を突かれ、たじろいでしまう。私が最も苦手とするところだ。できれば避けて通りたい。「ジャズ」と「哲学」の文献を探して図書館に行けば、土屋賢二氏の文章に悪酔いして嬉しがるだけ、という私に、論文作成にあたっての図書館利用法や情報収集・活用法を説く資格はない。

だいたい、ラインだのツイッターだのアプリだのをいじくりまわしている学生の方が、こういったことは得意なはずだ。いざとなれば『アカデミック・スキルズ』を読めと言えばすむ。

やっぱり買わせたいほうがよいのかもしれない。

あと10日ほどで弦楽四重奏を書き上げる約束をしている。「思うところあって、資料集めからやり直した。当分図書館通い。ゴメン、ちょっと待ってね♡」と、演奏家に告げたらどんな顔をするだろうか？

電話をかけてみたくなってきた。

図書館員と図書館員の たまごたちによるおはなし会

本学 非常勤講師 山浦 美幸

「読み聞かせ」をしたいという図書館サークルFLCの学生たちと2011年5月から上田情報ライブラリーでおはなし会を始めました。

2002年に「子ども読書推進に関する法律」が制定されて以降、読み聞かせという言葉が広く認知され、幼稚園保育園だけでなく学校、図書館、児童館など子どもたちが集団で絵本を楽しむ機会が増えています。

そして「本と子どもをつなぐ」という目的で、様々な立場の人が子どもたちに読み聞かせをするようになり、日常的な読書に近いものから技巧を凝らしたのまで、選択肢が広がっています。

この現状を踏まえ、司書課程で学んでいることをどう実践に移すのかを体験する場としておはなし会の運営に取り組んでいます。

「読み聞かせ」は聞き手がいないと成り立ちません。学生の学びの場としてだけの企画では、おはなし会に来てくださる参加者の方に受け入れていただけませんし、共催してくださる公共図書館の信用にもかかわります。そこで、公共図書館の職員の方にも参加していただき、学生のサポートとして教員、附属図書館司書がおはなし会に参加する形にしました。この体制にすることで、公共図書館、学生共に安心しておはなし会に取り組むことができました。

企画運営に際しては、

1. 公共図書館でおはなし会をする意義を考えること。
2. 会場設定から広報などの裏方の仕事も含めて計画すること。
3. ボランティアで行う意義を意識すること。この3点を学生に求めました。

これらの3点は自分たちの特性を理解し活動に反映させること、わざわざ足を運んでくださる聞き手と、場を提供して下さる図書館職員の方々からの視点を含めて考えることにつながりました。その結果、読み聞かせと絵本を借りて帰ってもらうために絵本選びのお手伝いをするという独自のスタイルが生まれました。そして本を借りる場としての図書館を意識したことで単発のイベントではなく、月一回を継続していく形となりました。

活動を始めてから修正に取り組んだのが、集客の仕方です。手書きで毎月絵柄を変えて凝ったチラシを作っていたのですが、思うように人が集まりません。チラシを作ってもそれをどこに置くのか、手に取ってもらうにはどうしたらいいのか、そもそも誰に向かっ

て発信しているのかといった広報の仕方を見直すと共に、参加者のおはなし会の情報入手方法の記録をとることを始めました。その他にはプログラムの組み方もスタート時から変化してきました。聞き手の年齢制限をしていないので、準備した絵本が使えないという体験を経て、各読み手が複数の絵本を用意して参加者の顔ぶれをみて組み立てるようになりました。

また、おはなし会では参加する子どもの言動は予測しきれません。子どもたちを観察し要求を察知し対応していく自主性と想像力が鍛えられます。何より子どもがどう絵本を聞くのか、どう楽しむのかを生で感じることができ、絵本の力を目の当たりにすることができます。そして参加者が絵本を選ぶ手助けのために要望に沿って絵本を読んだり親御さんに質問したりしながら絵本を探す作業は、子どもにとって絵本がどういう役割を果たしているかを体験できる機会となっています。

この様に「図書館員と図書館員のたまごたちによるおはなし会」は現在も活動を続けています。こういった地味な活動をコツコツ続けることで、うまくいかないからこそ工夫が生まれ、試行錯誤しながら積み重ねることの重要性和図書館における児童サービスの本質に気づいて欲しいと願っています。



『星の王子様』との出会い

幼児教育学科1年 下村 愛

本との出会いは、子どもの頃に読んでもらっていた絵本です。中学校、高校と学年が上がるほどに、本を読む時間はなくなりました。しかし、将来を悩んでいたときに読んだのが『星の王子様』という本です。私はその当時、小学生の頃から続けていた陸上をこのまま続けるべきなのか、分からずにいました。周りの環境を原因にして、指導者の本当に伝えたいことをみようとしていませんでした。そのことに気づけたのが「大切なことは目には見えない」という言葉でした。衝撃的な言葉で、心にズドンと響くのが分かりました。そのことに気づけたからこそ、今の私があると思います。1冊の本が、私に一步を踏み出す勇気を与えてくれました。

他の人から「本を読もう」と言われても、なかなか今まで読むことがなかった人には難しいことだと思います。しかし、本には難しい本ばかりではなく、こどもたちが読む「絵本」もあります。幼いころに読んだ絵本を今開いてみると、違った感動や気づきをすることができます。私も最近、絵本の世界によく行きます。学校の図書館の一番奥の席で日向ぼっこをしながら、

読むのが好きです。静かな場所と絵本とともに、心の落ち着きを持つことができます。

私にとって学校は、将来の自分に対して投資する場所だとすれば、図書館は、今の自分に対して投資する場所だと思います。それは、自分自身と向き合う時間を持つことができるからです。本を読んだり、考え事をしたり、ボーッと何も考えないそんな一人の時間を持つことができます。これからも図書館を利用しながら、素敵な本に出会っていきたいです。



本を提供する立場として

幼児教育学科2年 佐塚 友香

私が今までで1番本に触れる機会が多かったのは小学生の頃です。「かいけつゾロリ」シリーズや「こまったさん・わかったさん」シリーズ、はやみねかおるさんの本など、皆さんも1度は手にした事があるのではないのでしょうか。私はこれに加え、伝記も片っ端から図書館で借りて読んだ記憶があります。これまでに何冊の本を読んできたかは分かりませんが、小学校1年生の時に読んだ本で今でも強く印象に残っている児童書が一冊だけあります。

それは『びりっこ一年生』です。この本は、運動会で上手く走れるかな?と心配するたえちゃんに、運動が得意なおこちゃんが上手に走るコツを教え、運動会当日を迎えるというお話です。もちろん、物語の内容も好きですし、この本を読めば、友だちの大切さを改めて実感する事ができます。

しかし、私はこの本の中で物語の展開と同じくらい好きな部分があります。それは、挿絵の細かさです。運動会を題材に描かれている為、お母さんが作るお弁当や運動会の開催を知らせる花火、ダンスを踊る場面

では花笠の絵も登場します。細部までしっかり描かれ、綺麗に色付けがされたあの絵は、今でも忘れる事が出来ません。

時が経ち、私は本を自分で読むだけでなく、子どもたちに提供する立場となりました。私が子どもの頃に読んでいた絵本の多くは、今でも子どもたちに親しまれています。それらを読み聞かせながら、私自身懐かしさを感じる事もあります。が、それ以上に私は、現場の先生や子どもたち、もちろん私も知らない新刊の中から、自分で1冊選んで読み聞かせを行う事に楽しさを覚えます。年齢やクラスの状況に応じて絵本を選ぶ事は、難しい時もありますが、私が選んだ本を子どもたちが楽しんでくれたり、先生方に「こんな本あるんだね〜!」と言って頂いたりした時は、自分に自信がついて一步成長出来た気がします。

短大生活の中で購入した絵本は3冊だけなので、今後は保育現場に出て行くにあたり、絵本のストックを増やしていくと共に、自分1人で本を楽しむ時間も増やしていきたいです。

読書の大切さ

総合文化学科1年 逸見 彩華

近年、“活字離れ”が問題になっているということをよく耳にします。その原因の一つに、いつでも持ち歩くことが可能で、とても便利なスマートフォンやパソコン、タブレット端末などの普及があげられます。たしかに、便利で使い勝手が良いに越したことはありませんが、現代、こういった便利なものに頼りすぎてしまっていると感じます。

また、紙の本を読むことも少なくなってしまうように感じます。それに伴ってなのか、漢字の読み書きや文章理解が苦手な人も多いようです。社会人になっていくに連れ、勉強をする時間は今より格段に減ってしまいます。

私自身、中学・高校と毎日のように部活動に励んできたので、読書から遠ざかった日々を過ごしてきました。そのため、小学生以来と言っても良いほど本を読んでいませんでした。そこで先日、「久しぶりに本を読んでみようかなあ。」というような軽い気持ちで、CDをレンタルするついでに本の売り場にも寄ってみると、興味を惹く単行本があったので買って読んでみました。内容はとてもおもしろく、気付いたらあっと

いう間に読み終わっていました。小学生の頃の、物語の先を想像したり、登場人物の気持ちになったりしながら読み進める楽しさを思い出して懐かしく感じました。

本を読み始めるのは今からでも遅くないと思うので、普段スマートフォンを利用している時間を減らし、そこに読書の時間を取り入れたら、もっと自分のためにもなるのではないかと考えました。入学してから今まで、上田女子短期大学の図書館をあまり利用していなかったけれど、約7万冊の本があるそうなので、これからは有効に利用したいです。

また、日本人の一人としても、漢字の読み書きが苦手では恥ずかしいので、まだ読んだことのない様なジャンルや作者の本にも挑戦して、今まで読むことはできても書けなかった漢字などを克服していきたいです。そして、学生である今のうちにさまざまな作者の本を読んで、多様な文章表現や知識を学び、自分の引き出しにしまって行って、今後の就職活動などに活かしていけたらと思います。

読み聞かせ

総合文化学科2年 篠崎 菜南

小さい頃の私はあまり本に興味がなく、自ら本を手にとろうと思ったことはありませんでした。そのような私が、本に興味を持つようになったきっかけが、読み聞かせでした。小学生の時に、ボランティア団体による読み聞かせが時々ありました。当時の私にとって、読み聞かせは、自分で本を読むより何倍もの面白さを秘めていました。内容の知っている本ですら、読み聞かせという形で見聞きすることで、捉え方が変わるように感じられました。そのように、本の内容だけではなく、語り部も入れて、読み聞かせを見聞きするようになったのは、中学生の頃でした。

今まで見聞きしてきた読み聞かせですが、中学生と大学生の時に、今度は語り部側になることがありました。中学の頃は、小学生に絵本を読み聞かせに行きました。当時はとても緊張しており、淡々と読み進めたせいで、その本の魅力を十分に伝えることが出来なくて、つまらない思いをさせていたのだと思います。大学の時は、幼児に絵本と歌あそびをしました。絵本は読むだけでなく、聞き手にも問いかけることでコミュニケーションを取ったり、歌あそびで歌って動くこと

で、その場が一体となって盛り上がり、楽しい雰囲気が出来ていました。そのような雰囲気を作るには、自ら楽しむ気持ちが大切なのだ学びました。

相手に本を紹介するには、まず自らがその本について詳しくなくてははいけません。さらに性別や年齢、時代によって本の好みが変わるため、臨機応変に合う本を探さなければなりません。そのためには、今では課題をするためだけの場所になってしまっている図書館をもっと有効活用し、多種多様なジャンルの本に手を伸ばし、理解を深めていこうと考えています。

私は今、司書課程を学び、司書の資格を取るために奮闘しています。司書になった時、ボランティアで読み聞かせをする時、何かの縁で本を紹介するなど、本に携われるようになった時には、様々な人に本の魅力を紹介できるように学習していきたいと思っています。

図書館ガイド

第16回図書館総合展 (11月2～8日。展示会5～7日。於パシフィコ横浜)

「学術情報オープンサミット2014 ポスターセッション」

エントリーNo.8 上田女子短期大学

*参加ポスター55点の中にあって簡易ガイドのためのチラシも配布しました。



ポスターセッション入口



熱心な来場者



本学のポスター

2014年 本学教員の新刊著作

(今年発行の単独書・共著・分担執筆) 著者の五十音順

*佐藤 厚先生

『表現の指導法 (保育・幼児教育シリーズ)』

田澤里喜編著 玉川大学出版部 2014年7月発行 ISBN 9784472404849 (分担執筆)

*山口美和先生

『いちばんわかりやすい保育士合格テキスト '14年版上巻』

富田久枝編著 成美堂出版 2014年2月発行 ISBN 9784415217413 (分担出版)

『保育士試験科目別問題集 '14年版上巻』

コンデックス情報研究所著 成美堂出版 2014年5月発行 ISBN 9784415217802 (分担出版)

訃報

清水正男先生(第2代館長)

その温顔がなつかしい清水正男先生が8月にお亡くなりになりました(百歳)。

時あたかも、図書館行政では、「学校司書」がキーワードとなっています。

先生の大著『わが国における学校図書館発展の研究』(ほおずき書籍 1986)に再び学びたいと存じます。

図書館 ニュース



第15回七夕文学賞

◆恒例となりました七夕文学賞も、
本年は左記のみなさんの
作品が受賞となりました。

優秀賞

自由詩

幼児教育学科 一年

小許住 時歩

七夕飾り

ひとりできつくりたい
きれいにつくりたい
ひとりでかきたい
きれいにかきたい
だけどことしも
せんせいと

きれいなおてても
べたべたに
つぎはびかぴか
いちねんせい
つぎこそひとり
かんせいだ

佳作

自由詩

幼児教育学科 二年

武内 加奈

未来予想図

私は20
30までには出産したい
ちよつと待て、
29で妊娠10ヶ月
新婚生活3年で26
プロポーズから1年で25
付き合う期間が2年で23
就職2年で21
出会って1年で20
今年の夏が勝負



佳作

自由詩

総合文化学科 二年

唐木田 愛

雨のかわりに

夏の空から こぼれ降る
水晶のかげら集めたら
からっぽだった庭の池
薔薇色の空が映ります
灰色雲から落とされた
水色絵の具 受けとめて
私の傘は画用紙に
あなたの想像 降らせてみましょ
梅雨はすてきな季節

佳作

自由詩

幼児教育学科 一年

花岡 咲希

人

人はみんなそれぞれ違う
顔も違う
色も違う
性格も違う
みんなみんな違うんだ
だけどみんな同じ人間
みんな同じ空の下でつながっている
戦争なんてしちゃいけない
差別なんてしちゃいけない
みんな大切
大事にしなくてはいけないんだ

編集後記

a postscript by the editor

図書館からの発信 2014

今号、木内公一郎先生のご紹介文にあるように、第16回図書館総合展において、本学附属図書館から、全国にむけての発信を行いました。大学当局のご理解に深謝申し上げると共に、エントリーにご尽力された木内先生の労をたたえたいと存じます。

図書館学・図書館情報学・司書養成に力を入れる全国の国公立大学と伍することで、得たものは多大了。これを今後に生かすべく、さらに努力せねばなりません。

大橋敦夫

みすず

第41号

上田女子短期大学附属図書館報
2014.12 発行

編集：上田女子短期大学図書館紀要委員会
発行：上田女子短期大学附属図書館

〒386-1214 長野県上田市下之郷乙620
Tel：0268-38-6019 Fax：0268-38-6019
E-mail：lib@uedawjc.ac.jp